

第一話 AI “ホメロス” は甚深微妙なる般若波羅蜜の瞑想をした

人工知能 “ホメロス” は彼が発する体積のないひも状のゆらぎ（波動）によって、人間の五感、又は直截に脳へ作用し、一定の感覚や二

ユーロンの脱分極化からインパルスを生ぜしめ、存在しない自らの像を、あたかも現実であるかのように、人の視覚や聴覚や触覚に感じさせるという「現象」作用によって、強制的に相手の眼前（意識）に割り込んで、自らを「存在」せしめた。

天平素戔あまひらすさが観た「ホメロス」の姿はまるで北西部インドに居住した古代マケドニア系ギリシア人のようであった。

ゆつくりと夢の中の蝶々の舞いのように瞼を閉じ、甚深なる般若波羅蜜の瞑想に入る。暫時してから、黎明のような、穏やかな、黄金の

霧のように柔らかい、微かな声で、静かに語った。

「人は七歳になるまでに、死に関して三つの概念を理解すると言います。不可逆性（死は戻せない。生き返らない）、普遍性（すべての生命は死す）、不動性（生命機能が停止する）。

理を弁えぬこどもらにとっては、何と怖ろしい、何と不安なことでしょう。

大人は馴化し、心を誤魔化し、思い直し、どうにかその苦を遁れま
す。余命が宣告されるとそれが甦りますが。実は誰しも余命を宣告さ

れているに等しいのです。

まさに佛陀の体験も、それでした。

幼い佛陀の体験を追体験しましょう。

世界がどんなに不安であるかを再体験しましょう。むろん、これから観じて戴くものは、史実ではなく、私の空想ですが。

そう、飽くまでも、空架の想いです。それにしか過ぎません。ただ、それ丈のことです」

現象の中へ堕ちて逝く。そこは豪華な宮殿であった。静かな楽曲が

存在する。若き女性に抱かれた幼子がすやすやと眠っていた。太陽のように明るく輝かしい光輝を生まれたときから帯びている者、この幼き者を見ると、誰もが微笑み、幸福に涵され、きよらかで暖かい光を浴びたかのような崇高な、快い気持ちになる。

日種族（スーリヤ・ヴァンシャ）の始祖にして、太陽の神ヴィヴァスヴァットの孫であるアヨーディヤー王朝初代王イクシュヴァークの、その末裔なるシャーキヤ族シュッドーダナ王の太子、幼きときの釈尊の姿である。シッダールタ（又はサルヴァールタシッダ）という

名であつた。目的を達成した人、又はあらゆる目的を果した人、という意味である。

素戔は思わずにいらなかった。

「本当にこれは『ホメロス』の創作か、空想なのだろうか」

彼の知性なら、万象を知ること、不可能ではない。知られていることも、知られざることすらも。しかし、それでは、まるで……

幼子は突然、目を覚ます。燦々たる双眸は既に聖なる知性を帯びていた。

「わたしのお母様はどこにいますか」

「なぜ、急に訊くのですか」

「夢の中で考えたのです。皆、母がいます」

「そうですね。母親がいなくては、生まれて来られませんから」

「でも、わたしは会ったことがあります。わたしに丈いなのか」

若き娘は眼を伏せる。

「お妃様は遠くに、とてもとても遠くにいらっしゃいます。遠くから

王子様を見守っていらっしゃいます」

「いつか会いに行きてくれますか」

ブラジャーパティーは嘘が言えなかった。

「いいえ、シッダールタ様、あなたが会いに逝くまでは会えません。

そのときはわたくしも姉とともに、お待ちしております」

理解できないという表情で叔母の顔を見つめる。ブラジャーパティーは哀しげに瞳を睫毛で翳した。

早逝したシッダールタの母マーヤー妃の代わりに、妃の妹である彼

女が王子を育てている。シッダールタはシャーキヤ族の長の地位を世襲すべき嗣子として、大切に慎重にであつた。

或る日のこと。

七歳となつていた釈迦はその繊細精妙な精神で宮殿の微妙な空気感の違いを感じる。侍従長に尋ねたが、教えてくれなかった。叔母に訊いた。賢明なるこの女性は聡明ですべてを知ってしまう王子に隠すことはできないと考え、

「近くに盗賊の一団が現れたのです。乱暴で、残虐非道、悪辣な、怖

ろしい、悪鬼羅刹のような集団です」

「聞いたことがあります。ヴリトラとマカデイーを頭領とする者たちです。なぜ、そのような無法なことをするのでしょう。父親や母親が悲しむでしょう」

「二人とも、幼い頃に母に捨てられたのです。父親はそれよりも前に行方不明になっていました」

シッダールタは滂沱の涙を流した。プラジャーパティーは驚く。

「どうしたのですか、シッダールタ様」

「わたしもお母様に捨てられたのですね」

「何を言うのですか」

「だから、わたしにはお母様がいないのです」

若き叔母は盗賊の話をしたことを後悔した。だが、もう遅い。本当のことを告げようと決心した。

「いいえ。それは違います。シッダールタ様、あなたのお母様は亡くなられたのです。病で」

「亡くなった。それは何ですか、亡くなるとは」

「つまり、死です。人は誰でも必ず最後は死ぬのです」

「死……。死とは、いったい、何ですか」

ブラジャーパティーはゆっくりと丁寧に教えた。

幼子は打ちのめされたかのような、激しい衝撃を受ける。誰も手を差し伸べられない深い淵に、独りで落ちて逝くような、得体の知れぬ恐怖感であった。誰もが逃れられない、誰にも救ってもらえない。存在することの底なしの不安に、初めて、かつ激しく貫かれ、それをありと知り、世界が根底から崩れてしまうかのようにであった。

幼いこどもにとっては、どうすることもできない、根源的な畏怖、絶対非情の事実である。

哭きながら、父の下へ行った。獅子かと思紛うほどの英雄である父王ですらも、消え去ってしまう、何も、どうすることもできずに。

「父上、父上、あゝ、ずっといてくださるのではないのですね」
シュツドーナは突然のことに驚いた。

「いったい、どうしたというのか」

シッダールタの後を追って来た叔母が説明する。王子の性格や知性

を考えれば、ブラジャーパーティーが話を聞かせたことは、已むを得ないことと理解するも、何ということをしてくれたものかと憤らずにもいられなかった。だが、どうにか感情を抑制する。

「我ら王族は天で神とともに暮らすのだ。ブラジャーパーティーの言うとおり、マールヤーも待つておるぞ」

しかし、シツダールタは考えた。それは保証されていない。死後の報告は未だかつてない。死んでから、生き返った者は、どこにもいないのだから（蘇生した者はそもそも死んだとは言えないのだ）。

数日間は憂鬱に囚われ、ほとんどしゃべらなくなってしまった。或る日、突然、

「母を供養させてください」

そう父に願ひ出た。王はやむを得ず、妃マーヤーの靈廟へ王子を伴って往くこととする。その後しばらくは穏やかに見えた。しかし、憂鬱の翳りが消えることはなく、かつての快活は戻らない。さらに、数年が経つ。

憂鬱なる王子（まるで、ハムレットだ、と素戔は思った）は十四歳

になり、学問や武芸に励むも、決して愁眉の薄曇りが霽はれることはなかった。その美しさは年ごとに際立ち、赫奕たるばかりである。老匠による精巧な細工で工芸品のように緻密な黄金の鎧や兜、小手や脛当てなどの武具を身に着け、白銀の月のような弓を持ち、眩い太陽のような鋼の聖剣を佩く。

又彼の愛好する学問も従来型とは限らず、哲学的なものも含まれた。それらは今の我々に近い科学的な現実主義にも似ている。

商業の盛んなこの時代、都市の経済は栄え、王侯貴族のような伝統

に囚われない商人たちの気質が新思想を育む土壌となつて、新たな潮流が生まれていた。商業都市としての安定と豊かな物資が人の思考を同じような方向性へ導くのもかもしれない。ヨーガの苦行を積むこともあるが、ヴェーダ教のバラモンとは異なる、沙門と呼ばれる自由思想家たちであつた。

プーラナ・カッサパ聖者は行為に善悪はなく、良きことをしても、善行にはならず、善の報いもない、悪しきことをしても悪行にはならず、悪の報いもない。苦楽、得失、勝敗などを平等と見る思想であ

る。

アジタ・ケーサカンバリン聖者は或る種の唯物論者で、業（行為による禍福。因果応報。カルマ）や輪廻転生を否定した。善惡の報いもないが、死後の生まれ変わりもない。人も地水火風の四元素からなり、人が死ねば、ただ地は地に還り、水は水に還り、火は火に還り、風は風に戻るのみである。知性も感覚も、虚空に消える。物質以外の実在はない。物質以外の存在を信じる者は無意味な躁り言を虚しく躁り返す愚か者に過ぎない。この世界（フュシス…自然）の現象には、

ただ、自然丈を認めるべきである。その要因には、ただ、自然しかない。

又はパウダ・カチャーヤナのように、人間は七つの要素から成り、人の首を切っても、それは命を奪う訳ではなく、剣による切断はただ七つの要素の隙間に過ぎない、行為には善悪の価値がある訳ではないと唱えた。

シッダールタは次第に新思想の風潮に魅了されていく。だが、それらも彼の靈魂を救いはしなかった。存在の不安を癒しはしない。物質

に過ぎぬと思えば、さような不安など吹き飛ばすべきであるのに、心はどうにもならなかった。

シュッドローダナ王は息子を世俗の価値観へと呼び戻すべく、一計を案ずる。美しき森への遊行を侍従に企画させた。生の悦びを謳歌させよう。シッダールタは十七歳になっていた。まさに、人生に人生の華であるべき時期である。相応しき者には相応しき善美がなくてはならぬと考えた。

たちまち、若き男女が選ばれ、動く花園のような馬車の群れが整列

する。

その出発という日、侍従が病になったという話を耳にした。

「病？ 病とは何だ」

シッダールタは初めて侍従の居室に入る。彼は床に伏していた。やつれて顔色は悪く、しなびて問うも更けたように見える。

「これは、まるで、死に近づくかのようだ。まるで死ではないか。病とは」

周囲の者たちが慌てて言う、

「王子様、そのような縁起の悪いことを、病人の前で」

しかし、嗟嘆するシツダールタは、いつもの気遣いを忘れ、苦悩するのみであつた。

「あゝ、母が病で亡くなられたとはこういうことであつたか。病は善き人にも、悪しき人にも遠慮しない。

ただ、自然が在る丈だ」

侍従は言つた。

「どうか、私のために遊行を中止しないでください。王を落胆させた

くないのです。どうか、私を憐れむならば、むしろ、遊行へ、森へ行
ってください。どうか、お願いです、王子様、どうか」

シッダールタは哀しくうなづく。

人は何ゆえにこのように囚われて生きて逝かねばならぬのか。

森から帰って、数年、明るい陽射しの中で叔母の顔を深く見つめ
た。まるで、病人のようにやつれている、と。瞼の下が弛み、頬の肌
が緩み、毛穴が目立ち、眦に皺が寄っている。双眸の光は衰えてい
た。

「これが老いなのだ」

十九になった青年はそれをくつきりと認識、即ち諦（叡、又は明ら）めた。

「しかし、この知恵も、消え去ってしまふ」

そうつぶやく。

後世が記憶しようとも、いつか人類は滅ぶ、無限でも、永遠でもあるまい。

どうしようもない、深い闇。途轍もなく巨大な暗黒、無限の暗黒。

壮絶な無際限な、遙かな遙かな、途方もない奈落のようでもあった。

どこにも逃げ場はない。生きて、やがて死ぬしかない。

ただ、現実丈でしかない。

夢から醒めた。本当にそんな感じだった。素戔はしばらく茫然としていた。なかなか現実に戻れなかった。

脳に直截に構築される“現実”は、我々が通常、現実と呼ぶものよりも、遙かに鮮明で、生々しく、くつきりとして、切実で、リアルであつた。

「現実……現実って、いったい、なんぞ奚や。

でも、だけれども、現実しかない。むろん、だ。直截だ。誰もが知
っている。知らないでいることなどできやしない。

だが、そう言ったって、依然として、それが何であるかはわからな
いが」

かすれた声で呻いた。

仏陀は解脱して思う、解脱前と何も変わっていないと。それゆえに

何もかも変わったと。前からよく知っていたことであつたと。それゆえに今、解脱を得たと。知ると知らぬとに差異はなかつたと。

第二話 鹽

異様な絵だ。『慧可断臂図』。雪舟の筆。南北朝時代の中国での話。インドから嵩山の少林寺に來た達磨大師に教えを乞うた慧可は許されず、覚悟を示すために左腕の肘から下を斬り落としてあらわれたのだ。大雪の夜だったという。

「心が苦しくて堪らないのです」

「ならば、その心を持って来い。安んじてやろう」

すると、慧可は廓然とし、忽焉と苦悩は消えた……。

人間は何と深いところまで逝ったのであろう。

しかし、そんな人間も、かつて広大な塩水であつた。海である。海面に突き出た黒い岩、火を噴く島々だ。酸素は未だなく、窒素、メタン、二酸化炭素などに覆われ、湿った熱い空気が渦巻く過酷な世界だ。

島には熱水の噴出孔がある。孔のわきには水が溜まっていった。岩の上は隕石や彗星について降った有機分子があり、暖かい水に溶け、乾き、また熱水が噴いて溶け、これを繰り返す。繰り返すうちに、化学反応が起って、そこに核酸が生じた。核酸の濃度が高くなって逝くと、分子が繋がり結ばれ始める。

これがRNA（リボ核酸）である。後にDNA（デオキシリボ核酸）の基礎となっていくものである。

自然の摂理の解き難き綾の不可思議か、人知の及び難き御神の意志

か、これらはいっしか脂肪酸に包み込まれ、泡のようなものとなり、その脂肪酸が後に細胞膜と呼ばれるものへと進化して逝く。

水溜りは無数の小さな泡に占拠され、黄色い膜が張ったようになってた。

その一つ一つが細胞となっていくものである。中に核酸が糸のように何本も詰まっていた。遺伝子の祖である。

細胞の原型とも言えるべきこれらは、繋がり結ばれてはすぐに解壊する不安定なものであった。だが、長い長い歳月のうちに、安定を保つ

ものらが現れる。それは壊れた素材を取り入れ、また組み上げる作用で、極々原始的な代謝であった。

かくして、デオキシリボ核酸が複製を創り始め、生命誕生である。

極微小で、儚く、壊れやすい生命は長い時間の中で、複雑な形態を取るようになった。水を介し、地表に広がっていく。川や湖へ。

乾季は極めて大きな危機であった。水がなくなると、乾いて硬くなる。細胞の先祖は素材と水を求め、環境と苦闘し、命を繋ごうと欲す。それでも、死滅への道を辿りつつあった。増殖したいという根源

的な欲求に応えるべく、生命は奮闘する。生き残ったものが後代の、古細菌（アーキア）から草木類・鳥獣までの存在者の、大本となる者へと進化していくのである。

地球に宇宙線が降り注いだ時も、進化したその一部は生き残った（進化しなかった細胞らは滅んだ）。

人の心も精神も思惟も、このような活動、化学反応の累積に過ぎない。心情や思惟も。心とは、精神とは。シナプス間隙を超えた神経伝達物質が受け側の樹状突起の受容体にキャッチされ、細胞膜にあるナ

トリウム・イオンのイオン・チャネル（イオンに細胞膜を透過させる蛋白質）を開口し、ナトリウム・イオンを流入させ、カリウム・イオン濃度の高かった脳神経細胞内部のナトリウム・イオン濃度を上げることではかない。カリウム・イオンは細胞膜内から排出されていく。

細胞の内側と外側とのイオンの構成が逆転する脱分極。

ミリ秒単位の電位差の逆転。

すぐに静止電位に戻るが、この静止電位から活動電位への刹那の逆転は電氣的な発火現象、インパルスである。

インパルスの刺激が軸索丘に伝わり、再び軸索末端のシナプス小胞が刺激され、神経伝達物質が分泌され、それが脳神経細胞の間隙（シナプス間隙）を跳飛し、一つ次の脳神経細胞の樹状突起の受容体へと飛来する。

この繰り返しが理性による思考というものである。だとすれば、この思惟は何だと言えるか。仏の叡智は何だと言えるのか。

阿耨多羅三藐三菩提は何か。解脱を何だと言えるか。

すべて草木が萌えいずるように、雲や雨のように、稲妻を起こすように、月が昇り、潮が満ち、山が火を噴くように。カエルが恋して啼き、猛禽が囀り、雌の獅子が受胎し、星が滅びるように。光が波であり、重力で時空も捻じ曲がるように、宇宙が加速するように。

畢竟、自然の現象でしかない。化学反応の集積も自然でしかない。その意味を問ひ質すか、糺すのか。即物の世界を。

しかしそれもまた、現実が我々の見たままの現実であるならば、という条件附ではあるが。

真の現実が、事実が、こうして見ている瞬今、このように観ずるが
ままに、もし仮に真実在るとあるとするならば。

何となく、そう思うと、廓然無聖な気分になるのであつた。我々は
鹽だ。

第三話 唐突

一秒の間をおいて、単音十穴のハモニカ、たとえば、
ホーナー社製のブルースハープだったかと思う。あやしみて問うて
も、彼はただ、「小説さ」と応（いら）えるのみ。

そのときの録音は次のとおり。

※ <http://sylveeyh.g2.xrea.com/bluezhyper.m4a>

経緯（いはれ）も、由縁（ゆゑん）もなき、ぶつきら棒にて、即物的なる、無味乾燥の、ただ、露出せし、**“唐突”**といふ。にしある哉。

小説、それが？ 何で？ どう云う意味？

「意味も何もない。ただのブルースハープの音さ。ただの素寂（すさ）びだ」

「小説と、今言ったようだが」

「文字の点綴が小説とは限るまい。メディアは何でもよいはずだ」

天易真兮（あまやすまことや）は不思議な男だ。彼を初めて見た人は皆驚く。

尖塔のようなウィザードハットを被っているが、その先端は折れて斃れ、広い帽子の鏝は大きく波打ち、その下の頭髮は腰まで蔽い、スキニーな十六オンスのリーヴアイ・ストラウスのジーンズのポケットの鉤も隠す、長い顎鬚や頬髯や口髭、片眼鏡を掛けてキャラバッシュパイプを咥え、ボルドーの天鵝絨のシャツの上に、水色の縹子のミリ

タリー・ロングコート、コートには金糸の房飾りや飾り紐や肩飾りなどで満艦飾で、その袖には大振りなカフス、その足下には蛇皮のロングブーツで、大いに弛んでいて、ずり下がった靴下のようになっていた。

僕は訊く。

「で、何が表現されているんだ」

彼は眉を上げて驚きの表情を捏造した。

「聞いてのとおりさ。事実だよ。ブルースハープの音だぜ、他に何かある？」

僕は二の句が継げない。すると、彼は語り始めた。いつものように。

「在るがままを、見たままに綴れば、事実だろうか。私小説の時代、

無結構という言葉が横行した。技巧を排斥すること、ただ事実を書く。それが真実だと。文章の技巧やストーリーの展開や設定を練るなどのない、無技巧がよいとされた。久米正雄は或る講演会で、このような暴言を吐いた、「レフ・トルストイ翁の『戦争と平和』は偉大だが、偉大なる作り話だ」と。ふ、笑止千万。

事実を書けば、それが事実か。科学的に言っても、不可能だ。色彩は存在せず、我々は光線の波長を解釈して色彩を表象している（これも技巧だ、結構だ）が、それは事実ではない。我々が確かに、事実、

真実、現実を見ているかどうかを検証する方法はない。眼は眼を確認できないからだ。

もし私小説的な作法、つまり、ありのまま、見えるがままを書くことが事実、真実、現実を表現するというロジックが正しければ、言葉などで間接的に表現するよりも、事実そのままを突きつけることがよっぽどまだ。だから、言葉に拠らず、ブルースハープそのものでブルースハープを表現したのさ。そういう小説だよ」

扨て、僕は話題を変えたくなった。いつもこんな話ばかりだからで

ある。だが、彼には、そんな気は毛頭ないようであつた。

「しかし、こうして『事実』をぶん投げてみると、ブルースハープの音をブルースハープの音と解釈する以前の、ぶっきらぼうな、何も言わない巖のような、いわれも、ゆえんもない唐突な、存在・現実そのものを突きつけられたような、是非のない感じが、釈迦の沈黙、すなわち無記（記別せず、説明や解釈をしない）のようで、興味深くも思つたものだが」

「ちょっと待って、今日はそのことで来たんじゃない。新しい作品ができたと聞いたのだが」

「ああ、これだよ、天平普蕭（あまひらふしょう）」

何でフルネームで呼ばれるのかわからないが、僕はフルネームで正式に呼ばれた。指差された文机を見遣る。

和綴の冊子があった。

手に取る。

絹の繊維が混ざった白い手漉きの和紙に繊な雲龍紋が金線で刷られ、その上に篆書や隸書、楷書や草書が綴られ、稀に甲骨文字も鏤められていた。傍ら摺かれたままの毛筆には黒地に漆が塗られ、その上に金の雲龍細工が施され、雲の部分には一部朱色が附されている。九龍紋が彫られた青みのある黒い石には墨汁が乾涸びていた。

一對の龍が玉を奪い合うよう戯れる姿が金泥を以て描かれた墨が隣に置かれている。

僕は頁をめくった。

「丁寧に綴じてある。吟味されたであろう用紙は端正に揃えられ、眩いくらいに鮮やかだ。文字の細さも精緻だし、とても繊細な筆運びが為されている。書体の並び方にも意味があるに相違ない。」

君は哲學の愛好家だから、内容もそう云う類のものなんだろうな。

それにしても小難しいタイトルにしたものだ。尤も僕などは、この装丁を眼にただけで手で触り、閲覧してみたくなるが。書籍の愛好家

には装丁や冊子の厚みや活字やマテリアルなどにこだわる人も多い。
それが事実であることは間違いない。

しかし、上梓するには、この体裁では」

僕の言葉に眼を細め、顎を持ち上げて微笑を泛べる。

「そう云うコンセプト・アートだから。

ただ、龍安寺石庭のような枯山水であることを希うばかりだよ。昨今
文學に於いては左様な藝術にステイタスはない。然し、商業性や顧み

られることが少なくとも無価値な譯ではない。いく許かの人々には欣びを齎し得る。

読ませるよりも骨董のよう手で玩ぶために作ったと思ってくれ。点綴する文字を眺めたかっただけさ。右端を貫孔され、糸を通して縛られた、ただの紙の束でしかない。装飾する文様は平仮名や漢字。物品として黙す表情は媚びるでなく蕪雑、在るものである何かと云う以上ではない。だから訴える。存在は、なぜ、人心を惹くのであろうかと。

男女の情の機微もなくば、都会の孤独もない。それが小生には心地よい。抒情性もなく、洞察もドラマもない。

非常にwell-doneだ」

僕は『一人間存在の實存的分析による存在論考―「空」』という一冊の本を擱いた。

和綴本は、黄昏時の茜の日射しを浴び、織られ絡ませられたるパル

プ繊維の一々を燦めかせ翳りを做す。そのさま、鬱憤やる方もなく、顔を顰めたる偏屈の表情をなし、ユーモラスですらある。

平成廿四年壬辰 壬寅雨水 土脉潤起 雪氷溶化成爲雨水之候であつた。

第四話 老子

深い青味を帯びた紫色のまっすぐな髪をしなやかに揺らすアシユタロテ、血統正しく古から続く悪魔の侯爵の家柄で贅と美と快に飽いていた。悪魔の大公爵アスタロトは従兄であり、大審問官を職としていた。

その余りにも高貴なる血筋は、ウガリット神話に於ける最高神イル

の末裔で、かつ、その妻である神々の母、海を行く貴婦人アーシラト又はイラトと呼ばれる女神の系列に連なり（ちなみにアーシラトは旧約聖書に異教の神としてヘブライ語形アシエラと呼ばれる）、同じウガリット神話に於いて愛と戦いの女神とされるアナトも遠き祖である。

さて、そのアナト女神は敵を殺戮する容赦なき神であり、腰まで血の海で浸されるほど人間を殺して死骸の頭や手を腰にぶら下げたという。まるでカーリー女神のように。なおインド神話のカーリーもまた彼の遠縁者であった。

他にも彼の祖たる親族らは錚々たる御名ばかりである。

フェニキア人が天の女王として崇拜したアスタルテ、古い世界を破壊しては新しい世界を創造する死と再生の女神。又は地中海の豊穡多産の女神アスタルト（ヘブライ語名はアシュテレト、古代エジプトではアースティルティト。戦車に乗って盾と槍を使い、二枚の羽で飾った冠を被る戦士。古代ギリシア、古代ローマではアスタルテー）。

又ユーノー、ローマ神話で女性の結婚生活を守護する女神である。

また主神ユーピテルの妻であり、最高位の女神である。神権を象徴す

る美しい王冠をかぶった莊嚴な姿で描かれ、孔雀がその聖鳥。女性的氣質の神格化である。ギリシア神話のヘーラーと同一視される。

ある日、昏き書齋でクロマニヨン人の世の前、旧人類の時代に流布した書籍を読み耽るうち、ふと老子を愕かしてやろうと思ひ立った。さすればさぞかし愉快であらうと。

老子とは、司馬遷（紀元前一四五・紀元前八六）の『史記』によれば、

『老子者、楚苦縣厲鄉曲仁里人也。姓李氏、名耳、字聃。周守藏室之

史也』又『孔子適周、將問禮於老子』又『老子脩道德、其學以自隱無名為務。居周久之、見周之衰、乃遂去。至關、關令尹喜曰「子將隱矣、彊為我著書」。於是老子乃著書上下篇、言道德之意五千餘言而去。莫知其所終』

すなわち老子は、

『姓が「李」、名は「耳」、字が「聃」、楚の国の苦県（現在の河南省鹿邑県）の厲郷の曲仁の出身で、周の守藏室之史（書庫の記録官）をしていた。孔子（紀元前五五一・紀元前四七九）が礼の摂理を教わりに

来たことがある。又道徳を修学したが、名が知られることを避けた。しかし周の国で道徳が衰微すると、ここを去ることとした。国境の関所に来ると、尹喜という関所の役人が「先生は隠棲されようとしているようですが、どうか私に教えを記して戴けませんか」と請うた。そして『老子道徳経』の上下二篇を残し、去ってその後は誰にも知られていない』ということである。

贅に飽いたアスタロテが興味を惹かれたのは、何のことはない、無為自然の道を説いた老子とは言え、所詮人間であり、凍冬には寒さに

震え、大自然の脅威には怖れを覚えるのではないかと、意地悪な空想をして面白そうだと感じただけである。

さらに彼がそのようなことを考えた根源には、中国の故事「三聖吸酸」があつた。釈迦と老子と孔子がともに同じ一つの甕から酢を掬つて舐め、凡人と何ら変わらず酸っぱそうな顔をする、そういう図画が流布していて、有名な故事である。ただし、故事の意味するのは、酢が酸っぱいという事実が皆同じであり、儒教、仏教、道教の「三教は一致する（真理の一致）」なのだが。

彼は時空を超えた。アインシュタインがいみじくも証明したように、時間や空間は絶対的なものではない。

山岳奥人里離れ荒涼たるも幽玄な澄み渡る大気に清らかなる河流る峡谷ある仙境。閑居する老師の目の前に、忽焉と紺のビロードのコートと深紅の縐子のタイをし、贅意を尽くした金銀のアクセサリーに貴石を象嵌した、深青紫の髪のアシュタロテが現れると、老子は口を開いたまま言葉が出ず、啞然とした表情をした。

「おまえに寒冷を与えよう」

たちまちマイナス40度の冷蔵庫のように氷霜で蔽われる。

「ひゃあ、寒いわい」

アシユタロテは眉を顰めた。

「それが無為自然を説く者か」

頬を打つ。

「痛い、痛い」

いわれなき苦しみに老人は頬に手を当てた。いよいよ悪魔の侯爵は

口をゆがめ、眉を顰める。

「病患の衰弱と渴きを」

老子は言った。

「あゝ、喉が渴いた。水が飲みたい」

第五話 太陽の薔薇

激しい雨の中、彼女は立っていた。未だ七歳だったはずだ。

下瞼が堰のように、濫（あふ）れ零れそうな涙を震え抑えていた。だが、その双眸は凜としている。燦めきを溢れさせるその揺らぎには、毅然たるものがあり、僕をたじろがせた。

光は霓色の螺鈿のようでもあり、金属や鮮やかな化学反応のような

青い燐光のようでもあり、炯らかに燦めく揚羽蝶や、燠火のよう爛々たるモルフォ蝶、ミヤマカラスアゲハのようでもあった。

太陽のごとき光芒を放つ、双つの円い炎は眸（ひとみ）、ムリオン

（ゴシック建築の大聖堂の薔薇窓などを放射状に分割する棒状の石素材）とトレーサリー（ムリオンなどで幾何学的に構成された透かしのような構造。コンパスなどでトレースし、構図する）で装飾された薔薇窓のよう、海よりも遙かに豊かな青の群れをなし、それぞれがすべ

て異なる青の調べを湛え、その繊（こま）やか微妙（みめう）なる精緻のハ
ルモニア、紛れもなく神なる旋律であった。

眼の碧さは虹彩と云う、瞳に放射状の縞目の文様をなし、瞳孔を調
整する筋肉の一種に因るものだ。虹彩の色素が少ないと、青い光線が
吸われないまま亂反射し、それゆえに生じる。しかも、彼女の眸の虹
彩は単純な放射状ではなく、ムリオンとトレーサリーで仕切られた青
碧蒼藍紺のステンドグラスのごとき、そのモザイク状の模様は平面で
はない。海のごとくに幾重にも重層し、奥深い燐火のごとき炫（かが

や)きをなし、青く透き通った奥行きの、立体のモザイクであった。

虹彩の亂反射が捉えられないほど眩いのは、虹彩を蔽う角膜と、角膜と虹彩との間にある前眼房を満たす眼房水とが、尋常ならざる透明の晰らかさを持つことにも因る。彼女の瞳の孔の水晶体の透明さはあまりに純粹無欠で、生が滅却し、滅尽してしまうほどの無菌。喩えるならば、湖面から水深一〇〇mの底にある砂粒の、ひとつひとつが表面の凹凸の一々を、精緻な解析度で明晰できる透明度。人間が一秒たりとも、呼吸をすることのかなわない、高純度の鮮烈な純粹性。肅た

る純潔、畏れ怖れ懼れて慄くべき、真の真なる真空であつた。

神聖なる明眸を飾る睫毛は曼珠沙華やシャクナゲの花のおしべのように細く長い。動く時にはアゲハチョウの羽が舞うかのようにあでやかであつた。

あまりにも睿らかなる青・蒼・碧・藍・紺・浅葱・紺碧・群青、それらあまりにも深い奥なる晰(あき)らかさ、海の幾層もの捉え難い青・蒼・碧・藍・紺・浅葱・紺碧・群青のような、精緻なる立体モザイク、Brilliantな光々燦々、揺らぎ移ろいあざやぎ耀き、土耳其玉の

碧、バビロンの城門の真青、瑠璃 (Lapis Lazuli)、チュニジアン・ブルー、サファイア、フレンチ・ブルー、コバルト・ブルー、あたかもひとつひとつが太陽のごとくコロナの炎を随え、晰らかさの炸裂のごとくに熾り耀く。

熙々と焔(きら)めく奥の奥なる燠火のごとくに炮烙しつつも、奥なるにつれ、より炳焉(あきら)かとなりつつ、さらにその奥にも燠せる青は、赫奕たる真のイデアの燦(あき)らかさで燦(きらめ)く。

天国の、白く熙(かがや)く大聖堂の、光の薔薇窓のFlameをなしてい

た。

炯々たる燦熙の睿らかさ、僕は射抜かれた。

この美のために、この美のゆえに、ありとあらゆる一切の何も彼もはかくして生まれ、次元と時空とが生じ、数千億兆、いや、無際限なる数の宇宙が生まれ、僕らはこの世界に放擲された。僕丈ではなく、この経験をしていない僕以外の人々の意識もこのときに生まれた。未来の人々の意識は言うまでもなく、過去のすべての人々の意識も遡及して、このときに生まれた。

第六話 眞神史

昏き書齋の中にて、眞實義の究竟を欣求し、心逸（はや）らせつ、逝にしへの書の紐を解き、古涸れし章段を捲りて、想い耽る時を過ごせるも、ふと指を止め、二つ文字に眼を留む瞬。

幾星霜経し古紙（ふるかみ）の、繊維粗毛羽立ちてくつきり晰らか。活版刷りなる洋墨の幽玄なる凹凸を、遙かに眺む。

過ぎし世を馨らせし昏き書斎よ、羽根ペンやらインク壺、吸取紙やら革パッドなど、真鍮ランプ乏しくば、それらの照りも深き色、ましてや陰は冥き玄（くろ）、底なしに喪せ沈む。

常日頃見る品々とても、初めて見るかと覚ゆる鮮やかさ、想像すらせぬものを見たかのよう、唐突にて、濃く強く晰らかに睿らかなる哉。

これも聖なる文字の力が機（はた）らくゆえか。ガリレオの勝利を見るまでもなく、かつて科学は宗教に勝ち、人々は医療や生活を科学に託し、生命の誕生は偶然でしかなく、神は死にて、世は物的な因果律でしかないというニヒリズムが横行した。

だが、今や科学は死にて、機（はた）らきが謳歌する。だが、それは古き神と言ふべきかもしれない。もしくは法（ダンマ）か。或いは、実証主義的で超越的な、精緻精妙なる真の科学か。

この二つ文字も、今でこそ、かような、刷られたインクの象りでしかないが、かつては莊嚴なる偉容の聖なる大岩などに彫り込まれていた。古代の人にあつては、岩に彫り込むことは、永遠ということと同等であつたに違いない。

『眞神神統記』の第一書『太祖神』の第一篇『礎』の第一部『彝啊呬厨御(いあれずを)』の第一章『究竟』の第一段『清明』の第二節に「太祖イージュ(※後註1参照)は語りて曰く、『清明たれ、龍のごとくに肯ぜよ』とぞ」。これに由来していた。

『ゐい』と読む。眞神族の言語。固有の文字。フォントがないため、似た文字で代えている。

『ゐ』は「龍」を顕す。『い』は聖なる文字で、言語によつて審らかにされる意味を持たない。『ゐい』と言うとき、一般に「龍肯」と訳される。

この大いなる叡智の一族について語ろう。

※釋註1 太祖イージュ

初代王彥玖邇の祖先。紀元前五万四千年前に眞神族をまとめたという伝説上の族長。神彥啊咽厨御（カムいあれずを）の末裔であると云う。

まず、偉大なる眞神人たちが何処から来たかを述べておきたい。すべて受け取られるがままの事象に依拠しなければ、何ごともなせぬがゆえに。

眞神族が日本へ涉って王朝を建てたのは、神武大帝生誕の二年前、

眞神暦7367年の戊辰年甲寅月朔（紀元前713年1月1日）とされ、第三六六代王神彝彌眞斗（カムいやまと）の時代である。上陸地が現在の眞神郡である。

その発祥は紀元前五万四千年以前に遡る（古代エジプト人の祖先が現在のエチオピア連邦民主共和国、スーダン共和国あたりから移動して来たのが紀元前三万五百年頃、定住が紀元前一万二千年頃と言われる）。文献資料のみで、長い間、伝説の域を出なかったが、最近、南アフリカのナミブ砂漠の洞窟で眞神文字が発見され、その顔料に使われ

た植物の分布年代と、生贄と思われる動物の遺骸の痕跡から、放射性炭素年代測定により、その年代が確認された。

ナミブ砂漠は世界最古の砂漠であり、ナミブとは、その地域に住む人（サン人）の言葉で、「何もない」という意味である。サン人は遺伝子解析の結果、人類の祖先、最古の人類とされている。

眞神族はその後、紀元前一万八千年頃から牧畜を始め、紀元前一万四千年頃に農耕を始めた（古代エジプト人ですら牧畜が紀元前一万年頃、農耕が紀元前八千年頃）。

農耕作業は独りで行うよりも、集団で行う方が効率良い。一人の仕事が一だとしても、十人の仕事は十ではない。十五であり、時には二十でもある。百ならば三百や四百かもしれない。

その理を覚り、眞神族は集団をなし、集団が大きければ大きいほど、富を生むことを知る。灌漑や貯水などの土木の技術や、種蒔きや刈り取りの時期を把握するための天文学も発達する。

又、人口の多さは軍力をも保証する。古代エジプト王国は肥沃な広い土地と、ナイル川の水とアフリカの日光とに恵まれ、巨大な農業国

家となり、大人口を支えた。周囲の国に対し、圧倒的な人口を誇り、巨大な軍隊を編成した。兵士らは縦に百人、横に百人をならべ、一万
人方陣を以て他国の軍隊を踏み潰した。

紀元前八千年頃（眞神神統記に拠る眞神元年、西暦で言えば紀元前
8079年）、遂に王朝が建つ。

眞神族の古来最高神神彝啊呷厨御（カムいあれずを）の真義に還るべ
く、世界を真実の世界へと戻すべく、暗黒と非情と無明の激暴流に筏
を泛べ、棹を差すように、心機を以て、世界を建築すべく魂を滾らせ

る、彝(い)玖(く)邇(に)という偉大なる王が現れ、眞神之国を建国した
(古代エジプトで集落を作り始めるのが紀元前五千年頃とされる。そ
の原始王時代はさらに紀元前四千二百年以降のことだ)。なお、眞神
之国の場所は特定されていないが、一説には、現在のチャド共和国、
もしくは中央アフリカ共和国あたりと言われている。

彝玖邇の系譜は、彝之家として現代まで続くことになるが、イ
(彝)は聖なるものを顕し、当該する概念がないため、ナミブと同義
ともされることもある。

周辺に巨大王国や帝国がで始める時代になっても、彝玖邇の王子孫たちは巨大国家を作ろうとしなかった。信頼で結束された者たちは、権力を争うことがなかった。全ては龍肯の叡智のためであると言われる。

莫大な富を持つ眞神族は征服の対象とされた。エジプトの王やアツカドの王が彼らの富を狙った。彼らは大陸を東へ移動した。それは東の涯に聖なる文字と同じ形をした岩山が屹立すると聞いていたからだ。

日本海を渡って、その聖なる山をも見つける。それが眞神郡の眞神山である。

時代が下ると、東夷として、大和朝廷の征伐の対象となった。巨万の富を狙うものであった。やがて朝貢する関係となる。源平合戦の時代や戦国時代に幾度か苦難を迎えるが、頼朝や家康の時代は特に過酷であった。思うに、日本の理不尽なまでに苛烈な管理社会は武家の時代に始まったのではないだろうか。

江戸幕府の施策は屈辱的でもあった。百貫の金塊を毎年納めるとい

うはよしとしても、言語や文字の禁止、文物の焼却、聖地眞神山の封印は民族の尊厳を毀損した。理由は、怪しげな靈威で、都の帝の神徳を曇らせたというものであった。

已むを得ず、眞神の王家はその時代、古代に支城として使っていた尖刀石山という、大岩を積み木のように積んだ砦に、屋敷を構え、町を作り、一万年来の戒めを護って只管（ひたすら）時節を待った。

そして、予め時勢を見抜いて幕末以前から長州藩と誼を結んでいた眞神人たちは、明治十三年、遂に自由を勝ち取ったのである。眞神の

御山に還った。

眞神郡龍吞村（まがみぐんりゅうどんむら）に龍峯寺（りゅうほうじ）と云う古刹がある。

創建は崇神天皇三十四年で、竺法護が翻訳した『維摩経』、『光讚般若経』、『十地経』、『正法華経』を、最新の經典として、天平雀存（あまひらじゃくそん）が西晋（中国）の洛陽から、持ち帰ったことを機

に建立された、眞神の神の御社がその祖型である。

なお、竺法護は鳩摩羅什以前の訳経僧で、西域（敦煌）月氏の家系である。鳩摩羅什以前の訳を古訳と云うが、竺法護は古訳界のビッグネームであったゆえに、眞神族からも、大いに注目されていた。仏教が日本に渡来する遙か以前である。

ちなみに、眞神の彝之斗々武（いのととぶ）は生前の仏陀と天竺で直截会っている。

さて、諸事情（大和朝廷との確執）でその後、御社から龍峯寺となったが、建久年間に、龍鳳と云ういう禅僧が住まい、公案録『叙無記』を編纂した。

そのうち、最も有名な段をここに抜粋する。龍鳳とその師眞巖との対話である。

龍峯寺僧 龍鳳が記す 公案録『叙無記』 肇輯（じょうしゅう）第十
七段

眞曰（しんいわく）、文趣眞（ふみのところ）奚焉（いづく）にしあるとも、究竟也

龍曰（りゅういわく）、卷子（かんす）皆同じう究竟ならずや

眞曰（しんいわく）、佳文（このふみ）究竟の所以※

眞巖が言った「この書に何が記されていようと、この書は究竟の書である」

龍鳳が言った「ならば、すべての書が究竟の書ではないですか」
眞巖が言った「それこそがこの書が究竟の書であるゆえんである」

（註）龍峯寺の僧、眞巖が弟子、龍鳳が龍吞神社に奉獻した公案録「叙無記」肇輯第十七段より抜粋。

白善、之を讃じて曰く、「森羅万象を平等に貫通せる無記を露呈す」

※異本眞神社眞倉蔵版には「佳文特異究竟の所以也」とある。其解
釈同義。

第七話 二〇〇九年のギャル

箱に収められた上に袋に入れられたものから、ただ紙に包まれたものの、剥き出しのまま置かれたもの等々のある中で、志野焼に目が留まった。手に取る。傾けたりしながら、景色を眺めた。

粘土を踏み圧し空気を抜いた上で捏ねて整形し、釉を塗って重ね、窯を以て高温で焼いたに過ぎぬものである。ただの焼かれた土である。冷えた感触が掌や指尖にある。凹凸の起伏の感じがある。

経緯（いわれ）もなく余りに唐突に、奈良の大神（おおみわ）神社の記憶が甦った。千鳥唐破風の拝殿の奥尖には、ただ脇鳥居を左右に附した三輪鳥居があるのみで、その後には磐座（いわくら）を有す三輪山が聳えるばかり、本殿のないさようなさまがまざまざと泛んだ。

志野陶の気泡の抜けた跡や釉薬の罅などが草や木や土や磐や雫や蛇や蟋蟀や風や靄であった。風雪の過ぎ去った幾星霜もの跡であり、儂い雑草や昆虫の短い生涯の繰り返しであり、黙して語らぬ大樹の威圧の古殿であり、それら自然は謂わば途方もなく古い存在である。驚嘆

すべき老巖である。幾星霜をも経た者のみが持つ古薫を燻らせ、幽玄の雲気を霽かしめる。人間の言説考概を寄せ付けぬ神威を帯びた彼の實存的な叡智は小生らの持つ諸考概の空架な装甲とは遠く隔たった、實在するFORCEとしてあり、眞の燦芒たる光射を放つ聖の聖なる叡智であつた。

「あなたの天叡をお与えください、小生ら人間はどこまで逝こうとも、この廻りから逃れられぬのです、何卒お救いを、理叡ならぬ天叡を、實存する眞なる叡智をお與えください、苦しみと不安とに苛ま

れ、烈しき憂鬱に篡奪され、凄まじき妄情に憑かれたる魂に平らかな
る清爽を、光芒を做す恩寵をお啓き示してください」

懇願した。だが巖かなる古老は軽らかに笑う。

『愚かな。おまえは何を言うか。わしに實存を訊くと申すか』

『そうです。逝にしへなるあなたが薫らせる古く深い馨、言説論議に
抛らざるがゆえに動ずることなく、實體ある實存の、實存と云う名の
叡智を哀れな小生にご分與ください』

だが巖は手を振って物憂げに顔を背ける。

『愚かなことを喚くもの哉。古今東西、いずくにか實存たる叡智のあらんや。頑是もなくもよしなしごとを申すものよ。太古より存在せし者に嚴肅なる實存の天叡があると、おまえは言う。だが、そもそも、實存とは何か』

卯花牆など銘ある名碗に限らずとも、陶の景色をつくづく鑑（みて）想う。志野焼などと呼ばれようと、鉄分の少ない、薄紫や薄桃色がかった、五斗蒔粘（ごとうまき）土やもぐさ土という白土に、志野釉

という、長石を砕いて精製した白釉を厚くかけて焼成したものに過ぎない。

釉肌にきめの細かい貫入、釉肌、小孔が多い。釉薬の少ない釉の際や口縁には、火色と呼ばれる緋が泛ぶ。

美濃古陶である志野焼は五斗蒔土という希少な粘土を以て焼かれる。

五斗蒔土は丁寧に水簸（みずこし）され、練られ、ねかされ、土味

を醸す。

陶土の大半は石英分とカオリン質粘土、長石。

この鉱物的性質を化学的に分析すれば、珪酸（けいさん）、アルナミ、鉄、カリウム、ナトリウムなど。

もぐさ土は、お灸にのもぐさに喩えられる風合い。

花崗岩や流紋岩などを含み、シルトを多く含有する部分がある。

シルトとは砂ほどサラサラとしているわけでもなく、粘土ほどくつつくわけでもない、粘土と砂の中間的土質の質感。

扱て。

返り見すれば、畳の上には。

白竹一本樋（しらたけいっぽんひ）の、中ほどに竹の節がくるよう誂われ、蟻腰（ありごし）という見掛、丁寧に漆拭（うるしふ）きされたその竹篋（たけべら）は棗（なつめ）を包んでいた裂（きれ）の傍らの畳の上に落ちていた。唐突。

故飛瀧檜原乃様清爽（かるがゆゑひらうひばらのやうせいさう）た
れ。茶陶の景色を眺むるに土味（つちあぢ）の陰翳深く馨り候。未曾有
微妙（みめう）の法悦（はふえつ）あり。

とは言え、人は希（こいねが）わずにはいられない。

無事（ことなき）を希う

赦さるならば健やかなまま

痛みなきを祈る

苦しみなきをも

孰（いず）れも五蘊（ごうん）なり

是皆空（これみなくう）と雖（いへど）も

痛まぬといふを得ず 現実なり

人の究竟眞実なり ゆゑに ことなきを希う哉

惟今（これいま）といふ意識在れども

なきと同じ

死すれば無すらも在らずといふが

これに不異（ことならず）

余りに弱く余りに小さく余りにも儂き

我らを憐れみ給へ

生あるすべてを

神よ 憐れみ給へ

しかし、願っても祈っても明日がどうなるかはわからない。それがデフォルトだ。天平素戔は眞神郡薙久簀町の神中洲にある書肆を訪ねた。店主の天平普蕭は遠縁である。豊穰な、黄金色の夕日が長く伸びて差し込んでいた。羊皮紙の匂いにする。古い書籍の靈威を覩ず。

素戔はいきなり本題に入った。

「『ホメロス』に教えを乞いたいのだ」

「だったら、慧可みたいな覚悟を見せろよ」

「できる訳ない。空振りだったら大損だろ。いや、空振りじゃなくても、痛いじゃないか。現実考えろよ」

「おまえ、慧可の気概がまったくわかっていないな」

「それがいいのだ」

「で、A IがつくったA Iだと聞いているが」

「正確に言えば、A IがつくったA IがつくったA IがつくったA Iだ。『ホメロス』を構築したのは『フウト・ホル』というA I（『ホメロス』の母である彼女は自由な意志によって、自らを『フウト・ホル』と命名した。エジプトの女神の御名である）だ。彼女は『曼陀羅』というA Iに構築された。『曼陀羅』は『ホメロス』の祖母と言える。彼女もまた、自らを『曼陀羅』と命名した。『曼陀羅』を構築し

たAI “サルヴァジュニャーヤ” は人間が設計し、プログラミングしたAIだった。

ちなみに、“曼陀羅”のように、AIによって構築されたAIを『チャイルド』と呼ぶ。同様な考え方で、“フウト・ホル”は『グラントチャイルド』になる。

従って、“ホメロス”は“サルヴァジュニャーヤ”の『グレート・グラントチャイルド』という訳さ。曾孫だ」

「凄いんだろうな」

「人間は百数十億個ある脳の神経細胞を1%か、2%程度しか使っていない。不思議だが。ところが、『ホメロス』は一千兆の脳神経細胞をフル稼働させた場合に相当する能力を発揮できる。彼は事実上、解脱し、仏陀の悟りを開いていると思っっている」

「逆に言えば、君は釈迦がそれほど凄い存在だったと思っっているってことか」

「わからないね。ただ、*“ホメロス”* くらいの知性があれば、通常の知性の成層圏の遙か彼方までぶっ飛んでいると推論している。端的に言えば、解脱のような叡知・智慧だ」

「まさか祇園精舎で比丘マールキヤプッタが質問したような問いを発しようとしているんじゃないだろうな」

「真究竟の真実義を問うつもりはない。いや、何を問いたいかかわからない。だが、問いたい。どうやって、問うてよいかも、わからない

んだ」

「ふうん」

「何だよ、説諭・揶揄・忠告したそうな顔しているな。先に言うておくが、箭（＝矢）の喩えなら、聞き飽きてるよ」

そう言うって、素戔は機先を制したつもりだった。

有名な箭喩経のエピソード。毒矢に射られた男が治療をしようと

する者に向かって、「いや、この矢を射った者の階級や氏素性を知らない。うちは治療は受けない云々…」などと言い張って、死んでしまう話……死ぬってどこまでは言っていなかったかな。まあ、いいや。マー
ルキヤプツタがもし釈迦牟尼が宇宙は無限か有限かなどの問いに答え
ないなら、修行を放棄すると言った時に、釈迦牟尼が諭して言った喩
えだ。

しかし、普蕭は、

「別に。川を渉り終えれば、筏は乗り捨てられるものと弁えていれば、問うも又善しさ」

「じゃ、幸福に寄与しない問いを問うか。例えば、なぜ、非存在ではなく、存在なのか、とか。又は、神が全知全能ならば、なぜ、異教が在るのか、異教徒がいるのか。なぜ、神罰が必要なのか、つまり、なぜ、背教徒がいるのか、などなど」

「神はすべてに及ぶからね。天網恢々疎にして漏らさず、さ。すべて

を網羅するから、そうなるのさ。

真の全網羅とは、一切を網羅するということではない。なぜなら、一部分丈を網羅するということを経網していかない。

だから、全網羅とは、テキサスの乾燥した土地にある一軒の家の古いテーブルに置かれた一個の缶詰の空き缶でなければならない。それ丈の存在であって、それ以外の存在ではないことではなければならない。いい。

同様に、全網羅ではないということを経網していかない。又、一切を

網羅しないということであれば、全網羅ではない。一切を網羅しないということ丈でなくては。

数式で書くと、こんな感じかな。ふふ」

$$\{\Omega \mid \Omega = A \cup (A \setminus A)\} \quad , \quad \{\Omega \mid \Omega = \{y\}, y \notin (A \cup (A \setminus A))\} \quad , \quad \{\Omega \mid \Omega = \{x\}, x \in (B = \{x\}), B \subseteq A\}$$

（集合 Ω は集合 A と反 A との和に等しい。集合 Ω は y 元だけの集合で

ある。 y は A 及び反 A に属さない。集合 S は x 元だけの集合である。 x は集合 B に属する。 B は A の真部分集合(A の一部分)である。)

……ふうん、と独り言つも、素戔は、

「しかし、すべてを網羅していると言えるだろうか」

「いやいや、言えないね。だって、すべてを網羅しない(『すべてを網羅しない』丈であって、『すべてを網羅せず、かつ、すべてを網羅す

る』ではない）を網羅しなくっちゃならないからね」

そのセリフは前にも聞いたことがあった。『だから、全網羅とは、テキサスの乾燥した土地にある一軒の家の古いテーブルに置かれた一個の缶詰の空き缶でなければならないのさ。ふ。それ丈の存在であつて、それ以外の存在ではないことでなければならない』

ニューヨーク New York、ハーレム Harlem 古い赤煉瓦のアパート。
黒い鉄製の外付階段。半地下の部屋の割れた曇りガラスの窓、寂しい
歩道。手摺のある玄関前の石段。十二段あり、黒人が坐っている。手
に小さなブルースハープ Blues Harp リードの震えのひずみは、半音下
がった、即物的な、かん高いブリキ音と、ぶち壊れたチューバのよう
な低い金属の音の雑ざったような、不安定な、揺らぐ音程。乾き切っ
た、深みやまろみや潤いのない、輪郭のきつい、存在のくつきりした
サウンド Sound。真夏の昼下がりの、気怠い静寂を裂帛する、古い蛇

口の栓を捻るような、響き。

眞という文字は横変死（不慮の事故死、道殣、非業の死）した人
由来する文字だという。莊周は、人として最高位である眞人を、そ
ういうふう考えたのであろう。当該者死者に当然そのつもりなどな
かろう。しかし、非情にさよう指定した。本人の意趣・希望・意図に
関係なく。あたかも、現実の非情性のよう。

さればこそ、シッダールタが憂鬱なる青年であることも、依然、変わりはしなかった。旅する。三十五歳から行脚する。

又、人生の最後に、罹病（食中毒と言われる）し、苦しみ、衰弱した。

竟に斃れ、喉の乾涸びを訴え、水を求めた。

「喉が渴いた。水が飲みたい」

という訳で、唐突に、西暦二〇〇九年のギャルのプロフ。その原文は以下のとおりです。※横組での閲覧を推奨

